‘ὁ κόσμος, ἀλλοίωσις· ὁ βίος, ὑπόληψις.’

7号 1990.2.25
文・編集・発行
恋怪子

LIVE：TESTAMENT 1990.2.17 中野サンプラザ

←写真の前列左から右へ エリック・ピーターソン、ルイ・クレメンテ 後列左から右へ グレッグ・クリスチャン、チャック・ビリー、そしてアレックス・スコルニック!!!

5人がステージに出てくると、まわりからウォーッという声があがる。すぐに演奏がはじまる。はじめの音から髪の毛が逆立つような感動。ギターの音がきこえたとたんに胸がこみあげてくるものでいっぱいになった。アレックス・スコルニックのギターは実に魅力的で、ほとんどおわりまで目が離れなかった。ヴォーカル（チャック・ビリー）もいい、ベース（グレッグ・クリスチャン）もいい、ドラム（ルイ・クレメンテ）もリズム・ギター（エリック・ピーターソン）もいい。みーんなカッコイイ。だけど、アレックス・スコルニックは超カッコイイ!!! TESTAMENTの音楽は生命のエネルギーを全開にさせる。だから、身体が内部から熱くなる。5人とも、あれだけの高エネルギーを一瞬も下げることなく、それでいてリラックスしている。実に楽しそうにやっている。超スゴイ!!! TESTAMENT, GREAT! ELEGANT! AND COOL!!!

LIVE：ティラノザウルス 1990.2.1 川崎クラブ・チッタ

ティラノザウルスのステージを見ている私を見ている、もうひとりの私の存在を消すことができなかった。あ、あの人歌ってる、あ、あの人ギターを弾いている。そういうふうに感じるだけだった。「あの人」っていうことは、実は客席でつったっている「私」と同じ生身の人間って感じなわけ。だって演奏だけをきくことができなかったんだもの。いくらそうしようとしても*REMOTEのトラブル、すなわち生身の現実をステージにのっけちゃっているんだもの。そんなこと、あそこでは考えたくないから、ギターの音だけをきこうとしたんだけど、うまくいかなかった。

※REMOTEのトラブル。
この日のイベントは、6バンドが出たのだが、3番目に出てきたのがREMOTEの池田貴族で、自分たちの了解をとらないで、チラシに出演すると勝手に書いたので、自分たちはやらない。だけどいまレコーディング中で、比較的ヴォーカルとキーボードはひまなので、ま、一曲やります、とかいって何かやってひっこんだ。納得しないファンの女の子たちが~~貴族さあーん~~を連呼。そのうち関係者だかなんだかの人がステージに出てきて、いいわけがましいことをダラダラダラダラ。その女の子たちに「いくら叫んでももうメンバーは帰りましたから。君たちがそんなふうだと次のバンドが出にくいんだよね」とクドクドクドクド。ティラノザウルスが最後にやったんだけど、そういういきさつをステージにのっけちゃっていたのでした。

LIVE：STREET ROCKERS IN TOKYO 1990.2.12 中野サンプラザ

NOTHING TO LOSE STILL ALIVE, NASTY HABITS 横道坊主、それにアメリカのバンドROCK CITY ANGELS。NASTY HABITSのロックンロールはヨカッタヨー。横道坊主ではイカれりしちゃった。ROCK CITY ANGELSは後半!!!になった。ベースがいちばんカッコよかった。

BOOK：キース・リチャーズ 彼こそローリング・ストーンズ（バーバラ・シャロン著）

この本は、ローリング・ストーンズの創立から現在までの20年以上にわたる活動を追いながら、ギタリストのキース・リチャーズがいろいろなインタビューに答えたことが書かれている。ローリング・ストーンズ。その歌の内容も歌い方もひんしゅくを買うものが多く、その格好も言動もはなはだしくきたならしい。うぎつぎとひきおこす麻薬事件。演奏旅行でのばか騒ぎ。創立メンバーの一人であるブライアン・ジョーンズは麻薬中毒でプールで変死。アメリカでのコンサートでおこった殺人。まさに阿鼻叫喚の呈である。こんなことばかりが書かれている本など、なんの足しにもならないように思える。ところが充分読みごたえがあるのである。そこからは、ローリング・ストーンズのヘヴィなサウンドが、ズン・ズンと聴こえてくる。そして、なにかはげまされる思いがする。それは、ローリング・ストーンズが常に現在を生きていて、決して若い時をなつかしむ側にまわらないでいるからだと思う。若い時に同じ音楽が好きな同士がバンドをつくるのは、ありふれたことである。しかし、それを20年以上現役でやり続け、なおかつ若い時をなつかしむ側にまわらないでいることはこれはありふれたことではない。私たちはある年代になると、ともすれば若い時をなつかしむことになりがちである。音楽を聴いて感動することもなくなる。時たま、若い時に聴いた音楽を聴いて「あのころは…」と甘ったるい気分になるくらいのもの。ナツメロというわけである。全部とはいわないまでも、ある部分生きることに対して現役でなくなってしまう。この夏、ローリング・ストーンズの全米ツアーの映画"Let's Spend the Night Together"を見たが、ミック・ジャガーもキース・リチャーズも、厳しい深い表情がとても魅力的で、大いなる拍手をおくった。

上記の感想は、ロックン・ロールをききはじめた頃、ローリング・ストーンズというバンドを知り、興味がわきこの本を買って読んだときに書いたものである。ロックン・ロールを全く知らなかったので、どのレコードがどんなふうなのか、どのバンドがどんなふうなのか見当がつかない。ジャケットや録音年をなんとか手がかりにしたり、人に教えてもらったりしながら、中古レコード屋でつぎつぎレコードを買いあさった。はじめてきくロックン・ロールは新鮮で刺激的だった。ローリング・ストーンズのレコードも何枚か買ったし、よく聴いた。それから何年かたって、1990年2月ローリング・ストーンズが日本に来た。だけど私は何も関心がわかなかった。この何年かのあいだに、その時その時の私にとって新しくて、刺激的で、それなしではいられないほど必要なロックン・ロールにどんどん出会って、いまの私はそういうロックン・ロールでぎゅうぎゅうづめ。そうしたら、ローリング・ストーンズは私からこぼれ落ちていた。

LETTER：from 鈴木文子

多くの人達がロックンロールを娯楽として聞いていることに私は大賛成なのであります。人間が生きていくために必要な娯楽の中にロックが入っていて、その時その時で聞き流されて、具体的な形で心に残らなかったとしても、生きようとする動きによって、流されないようにつかまった枝の一部になることは、すばらしい、かつ重要な意味を持っていると思うのです。若い子に限っていえば、とくにその意味の持つ力は強力で、娯楽としてとらえられることに何の矛盾もないと思います。知らず知らずに生理作用として、音楽の中のロックを選択して、青春を過すうちの、ほんの一瞬でも一個の人間の手助けとなるなら、ロックンロールはすばらしい。子供の本能がロックを選び、そして自然と大人となるその過程に娯楽として体の中に流れているのだから、娯楽バンザイ、ロックバンザイといえないかしら?! 現代社会の危険性を敏感に取って、娯楽以上のものだとさとってロックしている子供もいるだろうけれど、私から見れば、人間が正常でいるために生まれたロックの意味に気ずかないで、演奏したり、こぶしを振っている子供の方が幸せだと思う。

2月の!!!ライブ（記事の分を除いて）

2/1 BELLETS 川崎クラブ・チッタ 2/12 MANIAXX（マニアックス）原宿歩行者天国
2/14 ティラノザウルス 渋谷ラ・ママ（8号に書きます）、2/18 ボイラーズ、BLUE ROSE、MANIAXX 原宿歩行者天国、2/20 ボイラーズ 新宿アンティノック（8号に書きます）

必見ライブ：JOHNNY WINTER

3/5（月）6（火）9（金）10（土）7:00PM
サウンドコロシアム MZA ¥5,500（全席立見）